

特別連載

オーディオオ人生

(8)

オーディオ愛好家の五条件

五味康祐

オーディオ愛好家——たとえば本誌を購読する人たち——を
そうでない人より私は信用する。「信じる」というのが誇大に過
ぎるなら、好きである。しかし究極のところ、そうした不特定
多数の音楽愛好家が喋々する「音」というものを私はいっさい
信用しない。音について私が隔意なく語れる相手は、いま二人
しかない。その人とは、例えばハルモニア・ムンディ盤で聴
くヘンデルの、こんどの「コンチェルト・グロツソ」（作品三）
のオーボエの音はちよつと気に入らぬ、と言われれば、それが
バロック当時の古楽器を使っている所為であるとか、コレギウ
ム・アウレウムの演奏にしては弦の録音にいやな誇張が感じら
れるとか、（コレギウム・アウレウム合奏団の弦楽器は、すべ
てガット弦を、古い調弦法で調弦して使っている）そんな説明
は何ひとつ聞かずとも私は納得するし、多分百人の批評家がコ
レギウム・アウレウム合奏団のこのレコードは素晴らしい、と激
賞しても「ちよつと気に入らぬ」その人の耳のほうを私は信じ
るだろう。

もちろん、彼と私とは音楽の聴き方もちがうし、感性もちが
う。それが彼の印象を有無なく信じられるのは、つづめて言え
ば人間を信じるからだ。彼がレコード音楽に、オーディオに注
いだ苦渋に満ちた愛と才月の歴史を私は知っている。

オーディオ愛好家は、次の五条件を満たしていなければなら
ない。そうでない人のオーディオに関わる発言を、参考にはし
ても信じようとは私は思わない。五条件とは斯うである——

①メーカー・ブランドを信用しないこと。

②ヒゲのこわさを知ること。

③ヒアリング・テストは、それ以上に測定器が羅列する数字
は、いっさい信じるに足らぬことを肝に銘じて知っている
こと。

④真空管を愛すること。

⑤金のない口惜しさを痛感していること。

右の条項に就いて、今回は語ってみよう——

*

①メーカー・ブランドを信用しないこと。

あれは、昭和三十一年だったから今から十七年前になるが、
当時、ハイ・ファイに関しては何事にもあれ、高城重躬氏を私
は神様のように信奉し、高城先生のおっしゃることなら無条件
に信じていた。理由はかんたんである。高城邸で鳴っていたで
かいコンクリートホーンのそれにまさる音を、私は聴いたこと
がなかったからだ。経済的に余裕が有るようになって、これ
までも述べたように、私も高城邸のような音で聴きたいとお
もい（出来るなら高城邸以上のをと、欲ばり）同じようなコン
クリート・ホーンを造った。設計は高城先生にお願いした。（リ
スニング・ルームの防音装置に関しても）ところで当時の高城
先生はワーファールを好まれていた。画家の岡鹿之助氏のお宅
の3ウェイもすべてワーファールの高・中・低音スピーカーで
構成され、その音の素晴らしさも岡邸で聴かせてもらって私は

知っている。高城先生は当然のように、だから拙宅のスピーカーもワーフデールでと申された。だがこれだけは我意を通させてもらって、ウーファーにはJ・Bランシングを使用し、中音域はタンノイ、高域のみワーフデールの「スーパー3」なるトウイーターを使用するという怪体なことにした。

そのせいだろうが音は良くなかったが、問題はトウイーターである。岡邸のと同じものなのだ。でも鳴ってくる音が全くちがう。今なら音というのは（とりわけ中・高域は）いかに低音の鳴り方で変るものかを私は知っているし、「スーパー3」の高音が味気ないのはJ・Bランシング、タンノイという奇体な混成旅団の故であるとも指摘できたろう。だが同時に、混成旅団にはそれなりに、別個な美点も必ずあることを今なら言いきることが出来る。

——それはともかく、この「スーパー3」の音に不満な私は、高城氏の推称される後藤ユニットに中・高域を取り替えたが、結果は前より一そう気に入らぬ悪い音だった。一時、私は絶望的になっていた。

ちょうどその頃、或る人の好意でワーフデールのエンクロージャー「Omni-directional」を入手することができた。Sandlind reflex enclosureと称するもので、いわゆるバッフル板に砂を詰めたコーナーステムのスピーカー・エンクロージャである。ワーフデール製でもっとも高価な（同社の「エアードール」のオリジナルより英価で十ポンド高かった）もので、これには「ス

ーパー3」が一個、上向けに取付けられている。さてこの「オムニ・ディレクショナル」から鳴る引きしまった低音の豊満さと、その高域の清澄な美しさに私はびっくりした。とても同じ「スーパー3」の音とは思えないし、岡邸で聴かせてもらった高域とも比較しようもないくらい、良い音なのである。

人間の耳は、常に自宅のものは良かれと念じて聴くもので、この念願に幾分なりとかなった場合はもう有頂天になり、それだけで「素晴らしい」と思いこむ。誰だつてそうだろう。したがって岡先生宅の高音とどう比較して、良いというのか実のところあまい話になるわけだが併し、私と同様に岡邸の音を聴いている友人二人ながら、砂バッフルのエンクロージャの方を絶賛しているのだから、少なくとも「悪くは絶対ない」とは言いきれぬだろう。

要するに、私の言いたいことは一つである。同じ「スーパー3」のトウイーターが極言すれば別物と思えるほどに、清澄感、³ びえにちがいがあり、つまり同じトウイーターを使用しているも、それだけでは意味がない、ということだ。トウイーターにこれは限らない。アンプ然りカートリッジ又しかりである。

ことわっておくが、右の場合「オムニ・ディレクショナル」がオリジナルだからというの理由にならない。アンプも同様だからである。人は啞うかも知れないがクワードのアンプを使用していたころ、その22のコントロール・ユニットを私は四個所有し、プログラム・ソースによって四通りに接続し替えて聴

いた。メインアンプ（モノラル）は六個購入した。（これらブリ・メインはそれぞれステレオ用の一対として一組は小林秀雄氏邸に、一組は今日出海氏邸に、いま一組は安岡章太郎宅のクォード・エレクトロスタティックのスピーカーに接続され、今も鳴っているはずだ）誰だつて無駄遣いはしたくない。しかしクワードのアンプに愛着をおぼえても——いやそれだけに猶更、たとえばピアノ曲でペダルを踏んだ時の或る音程の余韻、あるいは弦合奏でヴィオラの鳴り方に好ましいのとそうでないのがあるれば、それぞれを好ましく鳴らしたいと思うのが音キチだろうと私は思う。これはもう狂気の沙汰と承知で私は言うのである。したがって、好きなレコードを掛ける時、好きなレコードが四曲あれば極言すれば四つのコントロール・ユニットが要るわけになる。

クワードからマランツに変えたときは、さすがにこんな馬鹿なことは（経済的にも不可能で）しなかったが、そのかわり日本楽器銀座店から同じマランツ7Tのプリを三個はこんでもらい、拙宅のスピーカーに接続して、もつとも無難とおもえるものに決めた。これには約十日間を要した。一度聴き比べたくらいで良否はわかるものではない。幾度も幾度も、聴き馴れたレコードを掛けなおし、こちらの精神的、肉体的コンディションも勘考してほぼ満足のゆくものを採決するには、最低十日間のヒアリング・テストは必要だと今も私は思っている。

もちろんこうして十日間の試聴の結果、一つをえらんだから

と云って、アンプ単体でそれが優れているわけではあるまい。拙宅のスピーカー・エンクロージャと、そのとき使用しているカートリッジとの総合的ソノリティで優る（あるいは私にころよく聴こえる）までのことである。でもどうかすれば、これが同じマランツ7Tかと怪しみたいほど、或る楽器の響きに気に入らぬものがあり、そういうマランツ7Tなら只でやると言われても私は御免だ。マッキンC22でも似た経験を私はしてきた。そういう経験から、単にメーカー名を挙げられるだけでは、何程の信頼も私はもたぬというのである。いつも言うことながら、百人の愛好家が同じマランツ7Tのプリを使用していても、百の異なる音色でそれらは鳴っている。百人の教養が、あるいは趣味性が、好む音楽をひびかせている。つまりは百のそれぞれ異なる人生が鳴る。音楽を各自が鑑賞するとはそういうことなので、どうして製品名だけで音が判じられるものか。

音を出すのは器械ではなくその人のキャラクターだ。してみれば、メーカーブランドなど当てにはならない。各自のオーディオ愛好ぶりを推量する一資料にそれはすぎぬ、ということをお痛切に経験したことのない人と私はオーディオを語ろうとは思わない。

② ヒゲのこわさを知ること。

ちかごろは以前にもまして、ひめやかなSPブームだそうで、往年の名ソリストたちによる78回転盤のレコードが一枚何万円

かで購入取られ、収集されているという。そんな一枚を、或る人に見せてもらい私は暗然とした。

話にならぬヒゲだらけの盤だったからだ。レコードのセンターの孔を、ターンテーブルに嵌めるとき、漫然とレコードをあてがい、彼方此方、盤をずらせてターンテーブルへおさめる人がある。このときセンター孔の周辺にターンテーブルの中心の尖が当たった跡がのこる。光にあててみればすぐわかる。これをヒゲと称する。

戦前の愛好家は、日本盤は盤質が悪いのもっぱら海外盤を取寄せたが、演奏が気にいらぬと、また経済的急場をしのぐのに、こうした海外盤を売った。中古レコード店にこれらが『出版物』として出ているのを買うとき、いちばんに検べたのがこのヒゲである。

ヒゲがあるようならそれだけで盤面がどれほど無疵でも、値段は安くなった。レコード溝に疵がないのだから鳴る音に変わるわけではないようなもの、ヒゲをとどめて平然たるようなレコードの扱い方——もしくは聴き方——をする人間が真に愛好家であるわけがないという厳然たる不文律を彼等は守ったのだ。このことはステレオの今日も生きていて、と私はおもう。他人にせつたい大切なレコードを私は貸さない。一度はいったヒゲは永遠に消えない。三百枚余の大事なレコードを私は所持するが、今、その一枚だってヒゲはないのここに断言できる。レコードを、つまりは音楽をいかに大切に扱い、考えるかを端的に示

すこれは一条項だろう。

したがって、一枚に何万円を投じてレコードを買おうとその人の勝手だが、ヒゲだらけの盤でパハマンやシュナーベルやカペーがいいとほざく手合いを、私は信用しないのだ。

③ヒアリングテストは、それ以上に測定器が羅列する数字は、いつさい信じるに足らぬことを肝に銘じて知っていること。

原子核物理学で、音響学の權威でもあるアーサー・H・ベナードが、波動と聴覚の基礎知識をわかりやすくほくらに説いて『Horns, Strings, and Harmony』という本を著わしている。小暮陽三氏の訳で『音と楽器』と題して河出書房新社から出ているから、心ある人は一読されることをすすめるが、その著書の中で、ベナードはこんなことを言っている。

われわれの耳は三〇ないし四〇ヘルツ以下の低振動数の音を、明瞭なシグナルとして頭脳につたえることはできないし、本来、振動数が大きいほど音を高くわれわれは感じるが、しかし音の振動数を等間隔ずつ増加しても（たとえ二〇ヘルツごとに増加しても）耳には同じ割合で音が高くなったとは感じないものである。

また、振動体が激しく運動すると（大きな振幅で振動すると）空气中に大量のエネルギーを放出し、それぞれ耳に到達して「大きな音」と聞こえるのは誰でも知っているが、心理的に音の大

きいことと、物理的性質での音の大きさはかならずしも一致しない。このために世界中のオーケストラで常にいさかいが起っていることを知っておく必要がある。というのは、非常に大きな音は小さい音に比べて、振動数は同じでも低く聞える傾向があることで、このため血の気の多いトランペット奏者は自分の音が大きいときは、他人の楽器の音が高すぎる気がし、おとなしい同僚をへキエキさせ指揮者を困らせていることである。

これを更にわかりやすくすると、ピアノをひける人なら誰でもたやすく確かめられるが、ピアノの半音は、隣り同士の振動数が一・五九四三の比率になるよう細心の注意をはらって調節されている。つまり或る音はそれより半音低い音に比べて、およそ六パーセントほど振動数が高い。でもピアノの左端の鍵を叩き次々に隣りの鍵を叩いていくと、鍵盤の中間くらいまでは音の高さはほとんど同じ割合で高くなるが、鍵盤の右端に移るにつれてこの関係はくずれ、ついにはハッキリしなくなる。また、たとえば振動数一三〇ヘルツくらい（ピアノの中央ドより一オクターブ低い）の音をそつと叩いて約二二〇〇ヘルツの高振動数（中央ドより三オクターブ高いド）の音と大きさが同じと感じとるには、およそ一〇〇倍のエネルギーが必要だ。しかし反面、両方の音を強く叩くと、同じ大きさに聞えるエネルギーの比はほとんど一に近づいていく。この音の大きさがわれわれの耳の「振動数に応答」して変わる傾向がオーディオ愛好家を困惑させるはずである。彼等はそのために、レコードを鑑賞

する際、ポリウムを変えるときには、音色をも再調整しなければならぬから。でも実際に、オーディオ愛好家はそうしてないが、これはどんなに音量が増していても演奏中にイングリッシュ・ホルンかオーボエの音を聴き分け得ることに、自己満足できるからで、ハーモニイの美を賞味しているわけではないのである。

——以上かんたんな引用にとどめたが、こうしたベナードの研究から実に多くのものをわれわれは教えられる。先ずポリウムをあげ、大きな音でレコードを聴くのは鑑賞上いかに間違いをおかしやすいかをベナードは教えてくれる。可及的ひめやかな音量で、レコード音楽は鑑賞されるべきものである。でもこんなことは、メーカーの羅列する測定結果や、その数字には一行も記されていないし、音の大きさ一つに対しても、いかに聴覚は錯覚をとめないやすいものかという、この一事を考えても、うかつにヒアリング・テストで音の良否への判断など下せぬことを知るべきだろう。

テストで比較できるのは、音の差なのである。和ではない。だが和を抜きにしてはくらの耳は音の美を享受はできない。このことは、残る二項目とあわせ次号で更に述べようと思うが、何にせよ、測定結果やヒアリング・テストを盲信する手合いとオーディオを語ろうとは私は思わないものだ。

つづく

③ ヒアリング・テストを盲信しないこと。

音の味わいは、食道楽の人が言う「味覚」とたいへん似たところがあると私は思っている。

佳い味つけというのがある、お吸物(澄まし)の場合なら、ほとんどが具の味をだしに生かしてあり、一流の腕のいい板前ほど、塩加減でしか味つけをしない。したがって大変淡泊な味だが、その淡泊さの中に得も言えぬ滋味がある。でもこれを、辛くて粗雑な味の味噌汁を飲んだあとで口にする、もう滋味は消え、何かとても水っぽい味加減に感じるものだ。腕のいい板前だから、他の料理が何であるかも加味して、吸物の味をつけるという。

いわゆるヒアリング・テストを私が信じない理由がここにある。

淡泊で、しかも大変上品な味加減のその素晴らしさは、粗悪な味のあとでは賞味できないものである。人間の舌はそれほど暖味——というより他の味つけの影響をとどめやすくできているものなので、利き酒を咽喉に通さず、一口ふくんでは吐き出す理由がここにある。

ヒアリング・テストでは、余程、耳の熟練した人でもAのスピーカーからBのスピーカーに変った瞬間に、聴きわけているのは実は音質の差(もしくは音クセ)にすぎない。そのスピーカー・エンクロージャがもつ独自の音色の優秀性(また劣悪性)は、BからAに再び戻されたときにはもう聴き分け難いものとなるのがしばしばなのは、多くのスピーカーを切替えスイッチ一つで、次々ヒアリング・テストした人なら経験しているだろう。極悪品と優秀なスピーカーのちがいがいなら歴然である。何もヒアリング・テストなどせずともわかる。

歪の有無も比較的聴きとりやすい。しかし、スピーカー・エンクロージャにおよそ歪の皆無な製品などあるわけがない。いずれも何ヘルツあたりかは歪んでいるもので、歪みがしばしば耳にこころよく聴こえる場合も無しとしないのである。

あるプロのエレキ・ギター奏者は、あの電気ギターが発する狂躁音に似た唸るような凄惨な低音の歪みを、どうして平気で耳にしているのか、それでもミュージシャンか。せめて、何故スピーカーやアンプを歪みの少ない優秀なものに替えようとしなかつたのかと私が訝(いぶか)たら、五味さん、それはちがう、ぼくらはそういう意味でなら、歪まない音に美を感じなくなっている世代だ、ぼくらが感動するのは、あなたが歪んでいるという、そういう性質の音に対してだ、と答えてくれたことがある。彼等の耳は、歪んだ低音こそ音楽を感じるわけ、そう言われるとあのゴーゴー喫茶の騒音もなつとくがゆく。大なり小なり、そしてぼくらがレコード音楽の鑑賞で耳に沁みこませてきた音質にも、このエレキ奏者のそれに似た歪みの美字がやはりはしないのかとおもう。

むろん、一方で、つねにナマの音の素晴らしさをわれわれは充分に知っているが、ナマに近づけたい懇望は片時も忘れざるものではないが、日常、レコードを鑑賞するうちにこちらの耳は(個人差はあるにせよ)自家の装置が響かせる何ヘルツかの音色の歪みを格別な美のように感じとっていないとは断言できまい。

そういう聴覚が、数個のスピーカーを同時切り替えて鳴らし、どれほどの確に各スピーカーの音色の美点を聴き分けられようか、と

私は怪しむ。品のいい、したがってあくどくない音ほどあのお吸物のように、どぎつい音の直後ではボケた印象で受取られやすい。おもしろいことに——私の経験で言うことだが——アンプなどで強調されすぎた低域は(コントラバスのユニゾン等)音量が増すにつれてホール感の拡がりを錯覚させることがある。ピアノ曲で、低域の鳴るときにかぎり、それが超々大型ブランド・ピアノの響きのように幻覚されるのと似ている。ヴィオラがチェロに聴こえるのもそうで、すべては低域の歪みのいたずらだ。そしてピアノの場合なら、歪んでいるナと簡単にわかるそういう錯覚が、フル・メンバーのオーケストラの場合、スケールの大きさ——もしくはコンサート・ホールの広がりやを幻覚させるから厄介だ。断言してもよい、たいへん低域に歪みの少ないスピーカーを鳴らした直後に、やや歪みの多い(中高音域で音色に大差ない)スピーカーに切り替えると後者のほうが「臨場感がゆたか」にきこえる。前者があまりにスピーカーとしては優つてもヒアリング・テストでは、「臨場感ゆたか」な後者を選ぶだろう。誰がわるいでもない、耳がそのようにできているのだ。

同時切り替えによるヒアリング・テストなるものを、したがって私はいっさい信用しない。その信用できぬことを肝に銘じて知っている人とでなくばオーディオを語ろうとも思わない。測定結果に大差ない二個のスピーカー、アンプ、あるいはカートリッジの良否を真に聴きわけけるには最低、十日は必要と私の言う所以である。

むろん、そういう経験の豊富な人には瞬時にして判別の可能なこ

とも否定はしないが、瞬時に決められる場合、一方がよほど劣っているケースだろう。さもなくば試聴者側に、一つの「音の理想像」ともいうべきものがあり——ナマそのものとは微妙に違う点を注意しておきたい。何故ならそれは試聴者のレコード鑑賞による全体験の凝集したものだからだ——そういう理想像に、どれだけちかいか彼の識別の基準になるだろう。

いずれにしても、部品がグレード・アップされるほど識別は困難となる。十数個のスピーカーやアンプを並べ、短時の切り替えて良否を聴き分けられる道理がないと、一応私は思う。わかるのは両者の音の差にすぎない。甘いか辛いかだけである。でも味わいは、甘さと辛さの微妙にまざり合ったものだ。

④ 真空管を愛すること。

トランジスター・アンプに数多の長所があることは今更言うまでもない。今どきホヤ——真空管を通はこう呼んだ。火屋とは、ランプなどの火をおおうガラス製の筒のことだと辞書にある——を持ち出すなど懐古趣味とヤングはとるかも知れないが、オーディオ愛好家が真空管の良さを無視できる人はいないだろう。

好い例が「マランツ7」である。周知の通り、マランツ社もトランジスター・アンプ「マランツ7T」を出した。だが今以て、「幻の名器」と称され、きわめて声価の高いのは真空管の方であり誰も「7T」を絶讃はしない。

トランジスター・アンプは、技術的にもずいぶん改善され、性能

の測定結果を見ても真空管にまさる点は沢山ある。にもかかわらず、⁷7を「幻の名器」と人が呼ぶのはどういうわけだ。私は⁷7Tをずいぶん長いあいだ鳴らした。それからジムランのグラフィック・コントローラーSG520に替え、⁷7Tを追放した。メインはともに初めがマランツ8B、あとでマッキンMC275に聴きかえてである。むろんジムランのメイン(SE400S)やテクニクス20A、

上杉佳郎君の特製になるアンプでも比較しての結果である。私見を述べれば、⁷マランツ7TよりはるかにSG520がまさっている。それでもMC275をメインとして拙宅のスピーカーを鳴らしたかぎりに於て、真空管のマッキンC22に、SG520はかなわない。

分解能や、音の細部の鮮明度ではあきらかに520がまさるにしても、音が無機物のようにきこえ、こう言っていえば倍音が人工的である。したがって、倍音の美しさや余韻というものがSG520——というよりトランジスター・アンプそのものに、ない。倍音の美しさを抜きにしてオーディオで音の美を論じようとは私は思わぬ男だから、石のアンプは結局は、使いものにならないのを痛感したわけだ。これにはむろん、拙宅のスピーカー・エンクロージャが石には不向きなことも原因している。 (私は私の佳とするスピーカーを、つねにより良く鳴らすことしか念頭にない人間だ。ブックシェルフ・タイプは、きわめて能率のわるいものだから、しばしばアンプに大出力を要し、大きな出力Wを得るにはトランジスターが適しているのも否定はしない。しかしブックシェルフ・タイプのスピーカーで、アルテックA7やヴァイタボックスにまさる音の

鳴ったためしを私は知らない。どんな大出力のアンプを使った場合でもである。

もちろん、真空管にも泣き所はある。寿命の短いことなどその筆頭だろうと思う。更に悪いことに、一度、真空管を押し替ればかならず音は変わるものだ。出力管の場合とくにこの憾みは深い。

どんなに、真空管を替えることで私は泣いてきたか。いま聴いているMC275にしたって、茄子と私らが呼んでいるあの真空管——KT88を新品と押し替えると、もう元のように鳴ってくれない。

極言すれば新品のKT88を押し替えるたびに音は変っている。したがって、より満足な音を取戻すため——あるいは新しい魅力をひき出すために——スベアの茄子を十六本、次々押し替えたことがあった。ヒアリング・テストの場合と同じで、ペアで押し替えては数枚のレコードを掛けなおし、試聴するわけになる。大変な手間である。愚妻など、しまいは呆れ果てて笑っているが、笑わばわらえだ。

音の美は、こういう手間と夥しい時間をほくらから奪う。ついでに無駄も要求する。押し替えてようやく気に入った四本を決定したとき、残る十二本のナスビは新品とはいえ、スベアとは名のみのもので二度と使う気にはならない。したがって納屋にほり込んだままとなる。KT88、今一本、いくらするだろう。

おもえば、馬鹿にならぬ無駄遣いで、恐らくトランジスターならこういうことはあるまい。押し替えても別に音は変わらないじゃありませんか、などと愚妻はホザいていたが、変らないのを誰よりも願っていたのは当の私だ。だが違う。倍音の音のふくらみ方が違う。

どうかすれば低音がまるでちがう。少々神経過敏とは自分でもおもいながら、そういう茄子を次々と挿し替えて耳を澄まして、オーディオの醍醐味とはついにこうした倍音の微妙な差異を聴きわけける瞬間にあるのではなからうかと、想い到了た。二年前であった。

——以来、そのとき替えた茄子はそのまま鳴っている。真空管の寿命がおよそどれぐらいか、正確には知らないし、現在使用中のテープデッキやカートリッジが変れば、当然、納屋で埃をかぶっている真空管が必要になるかも知れない。これはわからない。が、いずれにせよ、真空管のよさを愛したことのない人にオーディオの何たるかを語ろうとは、私は思わない。

＊

⑤ 金のない口惜しさを痛感していること。

むかしとちがひ、今なら、出費さえ厭わねば最高級のパーツを取り揃えるのは容易である。金に糸目をつけず、そうした一流品を取り揃えて応接間に飾りつけ、悦に入っている男を現に私は知っている。だが何と、その豪華な応接間に鳴っている音の空々しさよ。彼のレコード・コレクションの貧弱さよ。

枚数だけは千枚ちかく揃えているが、これはという名盤がない。第一、どんな演奏をよしとするかを彼自身は聴き分けることが出来ない。レコード評で「名演」とあればヤミクモに買い揃えているだけである。ハイドンのクワルテット全八十二曲を彼は持っている。交響曲百四曲のうち、当時録音されていた七十余曲を揃えて彼は得意だった。私が「受難」をきかせてくれと言うと、「執情」ペートルヴェ

ンのか？ ハイドンにそんな曲があるのか？」と反問する。そういう人である。ハイドンとモーツアルトの関係が第四十九番のこのシンフォニーで解明されるかも知れないなどは、夢、彼は考えもしないらしい。今日のような情報過多の時代には、情報を集めるより容赦なくそいつを捨てる方向にこそ教養というものがある、彼はそれを気づかない。少なくともレコード音楽の鑑賞にあつて、凡曲を知るより知らぬ人の方が教養人であることを彼は知らない。どういう曲をコレクションに持っているかは、どんな曲を持たないかと同等の意義がある。まして演奏となれば、それは彼が鳴らす再生装置の音色に等しな意味や関わりをもつものだと私は思う。いつも言うことだが、鳴っているのはその人の人生の結集している音だ。金がないために、より優秀なスピーカーやアンプを購入できぬ憾みが、ここに生じる。金さえあれば……いくらそう思ったって無駄だ。キミがいま鳴らしている音の貧しさはキミの今の生活の答にほかならない。むろん誰にだって、未来はある。私にもあった。私はその未来に希望を見出し働いて来た。五十の齢を過ぎて今、私の家で鳴っている音に或る不満を見出すとき、五十年の生涯をかけて私にはこれだけの音しか自分のものに出来なかったのかと天を仰いで私は哭くのだ。この淋しさは、筆舌に尽し難い。

でも高望みしたってどうなるものでもない、自らを慰め、慰藉をもとめてレコードを掛ける。バッハやモーツアルトやペートルヴェンを聴く。時にはマラーを聴き、フォーレを聴き、シューベルトを聴き、少しでもせめて、音を良くしようと思念にレコードを拭

きカートリッジの埃を払う。深夜のこうした私の姿を、家人すら知らない。だが、まぎれもなく拙宅で今鳴っているのはこんな私の人生の哀歎をこめた音だ。

ハイドンの四十九番へ短調交響曲を初めて聴いたのは、例によつてS氏邸であった。私は貧乏で、三度の食事も満足に摂れぬころで、栄養失調にならぬようS氏邸で馳走にありついては、売れぬ小説を書いていた。四十九番を解説するのが主旨ではないので詳しくは触れないが、それまでハイドンの交響曲といえは、九十五番や「軍隊」や「時計」驚愕「くらいしか知らなかったから、はじめて「受難」を聴いて私は茫然となったのを忘れない。パパ・ハイドンにこんな沈痛なソノリテイがあつたのかと耳を疑つたのである。

レコードは、当時のことゆえ無論モノラルで、ロンドン・モーツァルト・ブレーヤーなる人たちの演奏だった。裏面にモーツァルトの「喜遊曲ニ長調」K一三二が入っていた。だから言うわけではないが、この沈痛な情熱はモーツァルトだ、これはモーツァルトの剽窃にちがいないと思つたことを告白する。演奏も実によかつた。——白状すれば、ハイドンのそれはそれ迄もつばらシエルヘンの振るもの（ウィーン国立歌劇場のオケ）で聴いていて、そのためでもあるまいがハイドンの交響曲は朝聴く音楽だと、私はきめていた。それで一そう四十九番の悲痛さに息をのんだ。

まだ聴いていない人は、是非いちど試聴してほしい。ハイドンの中でも白眉の名曲と私は信じる。私は贅美なものにこそ悲しみのあつたのをこの曲で痛切に知つたのである。私は貧乏だ、しかし、だか

ら悲しいなどとは思ひあがりも甚だしいと己れにこの時言いきかせた。貧乏は単なる貧しさにすぎない。それは悲しむべきことではない、悲しみは贅美の中にこそ宿る、そう「受難」は教えてくれたのである。その意味でもこれは《モーツァルトの声》と私にはきこえた。S氏邸から帰ると、私はハイドンの伝記を調べた。ハイドンが車大工の息子で、当然貧乏で、ついに一度も正式に作曲法を習つたことさえなく、パンのために働き、夜は町の流しのセレナード楽団に加わり、あるいは下僕をつとめ屋根裏に住みながら独学で勉強したことを知つた。私はもう一度「受難」の調べを、想ひ泛べようとした。でもどうしても想ひ出せなかつた。

この時ほど、金がほしいと思つたことはない。金さえあれば四十九番のレコードが買える、それをいい音で聴ける……そんな意味からではない。どう言えはいいか、ハイドンの味わつた貧しさが無性にこの時、私には応えたのだ。ハイドンの立場で金が欲しいと思つた。矛盾しているようだが、彼が教えてくれた贅美のうちにある悲しみは、つまりは過去の彼の貧しさにつながっている。だからこそ美しく響くのだろうと私はおもう。

少々、説明が舌たらずだが、音も亦（また）そのようなものではないのか。貧しさを知らぬ人に、貧乏の口惜しさを味わっていない人にどうして、オーディオ愛好家の苦心して出す美などわかるものか。美しい音色が創り出せようか？。

つづく

11